

はじめに

「社会」とは一言でいうなら人間関係のことであり、「社会調査」はその人間関係についての確かな知識を得るための方法です。初めて社会調査を学ぶ方でも、その手順だけでなく背後にある原理まで理解することができ、「リサーチ・マインド（きちんとした社会調査を行うのに必要なものの見方・とらえ方）」が磨かれる。これが本書のめざすところです。さらに本書には、社会調査の方法論の発展にいくらかでも貢献できたらという筆者の思いも込められています。

現代に生きる私たちは、社会（人間関係）というものについて、誰でもいくらかは、あるいは大いに、関心を持っているでしょう。しかし、いまから200年かそれ以上前の時代には、多くの人は何とか日々暮らしていくことで精一杯で、ごく身近な範囲を除けば社会に関心を持つのは難しかったと思われます。そういう状況の中で社会に最初に関心を持ったのは、政治的な支配者たちでした。彼らは、例えば徴税や徴兵のように、自分たちに必要なものを支配下にある人々から得る必要があり、そのためには支配地域の人口や土地からの収穫量などを知る必要があったわけです。

こうして社会調査は、今日の言葉でいうなら行政調査として始まったのです。しかし近代化にともなって、いわゆる「科学」が発達してくると、社会調査にも「科学」の基準である「真理」が持ち込まれます。つまり、社会調査によって「真理」という「確かな」知識を得るためには、「科学」的な手順や原理にしたがわなければならなくなったのです。

現在でも、国勢調査などの行政調査は盛んに行われています。さらに、マスメディアによる世論調査、企業によるマーケティング調査など、「科学」的研究が目的ではない社会調査もたくさん行われています。しかしそうした

調査でも、調査結果を「確かな」もの（真理）と主張するためには、研究目的の社会調査と同じ手順や原理にしたがうしかないので。

そのような手順や原理を理解することのメリットは、主に2つあると思います。1つは、それらにしたがっていない（つまり非科学的な）社会調査の結果にだまされにくくなること、そしてもう1つは、卒論や仕事などで社会調査を行う必要があるときに役立つことです。

気になった方もいると思いますが、ここまでは「科学」「真理」「確かな」といった言葉を、カッコをつけて使いました。それは、今日までに「科学」というものについての見方（科学観）がかなり変化してきており、これらの言葉もその変化を意識しつつ使う必要があることに注意を促すためです。そこで、本書を構成する8つのレクチャーの第1講で、科学観の変化について手短かに解説することにしました。

第2講では、社会調査とその関連領域でよく使われる言葉の意味を解説します。お急ぎの場合、第1講は後回しにしても問題ありませんが、ここで解説される言葉は本書でもよく使いますから、第2講は必ずお読みください。また、辞書的に使いやすいように、付録として言葉の意味のリストも用意しました。

第3講も、社会調査の計画段階に欠かせない文献の使い方や探し方のことが書かれており、外すわけにはいきません。第4講から第7講は、量的・質的データのさまざまな収集方法と分析方法の解説なので、ご自分の計画した社会調査を実施するのに必要な部分を読んでいただければ、とりあえず用は足ります。また、関連の付録として、質問紙と対象者への説明文書の見本、統計解析ソフトのSPSSの操作手順を加えました。

第8講は社会調査の倫理の話で、とくに後半部分は倫理審査を受ける際には必読です。そして補講では、筆者の研究テーマの1つである社会調査の方法論について、現時点での考えを文章にしてみました。補講ですから、余裕のあるときに読んでみてください。

このほか、論文や報告の構成についての手短な解説と文献案内を付録としました。

このように内容は盛りだくさんですが、どの部分もコンパクトでわかりやすいので、スピーディに読み進められると思います。また、必読部分を特定するには、目次だけでなく巻末の索引もとても役に立つはずです。そしてすべてを読み終えたとき、リサーチ・マインドが磨かれたことを実感していただけのようにしたら、筆者としてこれ以上の喜びはありません。

最後に私事で恐縮ですが、本書を出版できたのは実に多くの方々のおかげです。中でも、かつての筆者の同僚で、現在は聖路加看護大学の中山和弘先生に感謝いたします。先生との共同研究や勉強会で、量的データの収集・分析方法に習熟する機会がなかったら、本書を構想することはなかったでしょう。

また、慶應義塾大学の有末賢先生には、筆者を慶應義塾大学出版会に力強くご推薦いただきました。そして、最初に出版のご相談をし、有末先生にお取り次ぎくださったのが慶應義塾大学の竹村英樹先生です。両先生に改めてお礼申しあげます。

さらに、慶應義塾大学出版会の岡田智武様、綿貫ちえみ様には、編集などの実務面で大変ご尽力いただきました。どうもありがとうございました。

2012 年盛夏

儘田 徹

目 次

はじめに i

第1講 科学観の変化と社会調査————— 1

第1講のねらい 2

1 原型としての経験主義 2

2 実証主義と論理実証主義 2

3 反証主義 4

4 パラダイム論 5

5 パラダイム論以降の科学観—科学知識の社会学、実験室の人類学— 6

6 社会調査の科学としての特徴 7

第1講のまとめ 7

第2講 よく使われる言葉の意味————— 9

第2講のねらい 10

1 理論 10

2 概念、定義、指標化 10

3 変数 12

4 尺度 13

5 加算尺度 14

6 信頼性と妥当性 14

第2講のまとめ 16

第3講 社会調査を始めるために————— 19

第3講のねらい 20

- 1 社会調査が必要か確認する 20
- 2 公表されている社会調査データを利用するときの留意点 21
- 3 社会調査にはどんな方法があるか 22
- 4 データの収集方法を選択する 23
- 5 知りたいこと(テーマ)をはっきりさせる—文献の使い方・探し方— 24

第3講のまとめ 26

第4講 量的データの収集方法—質問紙調査— 27

第4講のねらい 28

- 1 質問紙調査とは 28
- 2 質問紙調査の種類 28
- 3 質問紙調査の各方法の特徴 29
- 4 質問紙調査における対象者の選び方 31
- 5 サンプルングのための台帳 33
 - (1) 住民基本台帳 33
 - (2) そのほかの台帳 34
- 6 サンプルングの主な方法 35
 - (1) 単純無作為抽出法 35
 - (2) 系統抽出法 36
 - (3) 多段抽出法と層化抽出法 37
- 7 質問紙の作成で留意すべきこと 38
 - (1) 実物の質問紙を参考にしよう 38
 - (2) 既存の尺度を活用しよう 39
 - (3) ワーディングに注意しよう 39
 - (4) 質問文の並べ方に注意しよう 40

(5) 選択肢の作り方に注意しよう	41
(6) 最大限にブリコーディングされた質問紙を作成しよう	42
(7) できあがったらしっかりチェックしよう	43
8 質問紙の作成以外で留意すべきこと	43
(1) 調査の実施前に準備すべきこと	43
(2) 質問紙を回収するときに必要なこと	44
(3) データの入力とチェックの仕方	45
第4講のまとめ	46

第5講 量的データの分析方法————— 49

第5講のねらい	50
1 単純集計	50
2 2変数の関連の分析	51
(1) クロス集計	51
(2) 平均値の差と相関係数	53
3 統計的検定	56
(1) 基本的な考え方	56
(2) χ^2 (カイ二乗) 検定	58
(3) t検定	60
(4) 一元配置分散分析と多重比較	61
(5) 相関係数の検定	62
(6) 対象者が一定数以上のデータについて統計的検定を行う意味	63
4 疑似相関と因果の方向性	64
5 変数のコントロール	66
6 多変量解析	68
(1) 従属変数がカテゴリー変数の場合の多変量解析	68
(2) 従属変数が量的変数の場合の多変量解析	70
(3) 因子分析	72
第5講のまとめ	75

第6講 質的データの収集方法—インタビューと参与観察— 79

第6講のねらい 80

- 1 インタビュー、参与観察、フィールドワーク 80
- 2 インタビューの種類と特徴 80
- 3 インタビューにおける対象者の選び方 81
- 4 インタビューガイドの作り方と使い方 84
- 5 インタビュー進行上の留意事項 85
- 6 そのほかの準備 87
- 7 インタビュー終了後に行うべきこと 88
- 8 参与観察について 90

第6講のまとめ 90

第7講 質的データの分析方法————— 93

第7講のねらい 94

- 1 グラウンデッド・セオリー・アプローチ—B. グレイザー・A. ストラウス『死のアウェアネス理論と看護』を事例として— 94
 - (1) 『死のアウェアネス理論と看護』の概要 94
 - (2) コーディングの方法 98
- 2 エスノグラフィー的方法—W. ホワイト『ストリート・コーナー・ソサエティ』を事例として— 106
 - (1) エスノグラフィー的方法とは 106
 - (2) 『ストリート・コーナー・ソサエティ』のねらい 106
 - (3) 分析結果—エピソードと洞察— 107
- 3 心性史的方法—P. アリエス『〈子供〉の誕生』を事例として— 111
 - (1) 心性史的方法とは 111
 - (2) 『〈子供〉の誕生』のねらい 111
 - (3) データと分析結果 112

4 エスノメソドロロジーの会話分析—秋葉昌樹「保健室のエスノメソドロロジー」を事例として—	115
(1) エスノメソドロロジーの会話分析とは	115
(2) 「保健室のエスノメソドロロジー」のねらい	115
(3) データと分析結果	115
第7講のまとめ	118

第8講 社会調査の倫理————— 121

第8講のねらい	122
1 社会調査と倫理の制度化	122
(1) 社会と社会調査の複雑な関係から倫理へ	122
(2) 倫理の制度化の動き	123
2 倫理原則と倫理審査	124
(1) 5つの原則	124
(2) 有意義さの原則と不利益最小化の原則	125
(3) 説明と同意の原則	126
(4) 説明文書と同意書	127
(5) 依頼文書と承諾書	128
(6) 拒否権保証の原則	128
(7) プライバシー保護の原則	129
(8) 著作権	131
第8講のまとめ	131

補講 量的データや質的データを分析して何がわかるのか———— 133

—「対話的構築主義」の観点から—

1 はじめに	134
2 質的データとは何であり、それを分析して何がわかるのか	135
3 量的データとは何であり、それを分析して何がわかるのか	137
4 まとめ	139

付録 1	よく使われる言葉の意味のリスト	143
付録 2	質問紙と対象者への説明文書の見本	144
付録 3	量的データを分析するための SPSS の操作手順	147
付録 4	論文や報告の構成について	152
付録 5	文献案内	153
索引		155

第1講

科学観の変化と社会調査



第1講のねらい

「はじめに」でも述べたように、今日までに科学というものについての見方（科学観）がかなり変化してきており、そのことが社会調査の科学としての特徴にも影響を及ぼしています。そこで以下では、科学観の変化やその社会調査への影響について、手短かに解説します。

1 原型としての経験主義

医療の分野で「evidence-based」という言葉が流行したことがありました。「evidence」は証拠とか根拠ということなので、「根拠のある医療をしよう」というような意味になります。この「**根拠がある**」ということこそ、科学をほかの人間の活動から区別しようとした人たちが最初に考えついた、科学に固有の特徴でした。

高校の倫理の授業などで聞いたことがある人もいるでしょうが、イギリスのフランシス・ベーコンという人が考えた科学の特徴は、**経験によって得られたデータを知識の根拠としている**ということだったのです。このように、**経験をすべての知識の根本とする立場を「経験主義」といいます。**

データとか科学というと、自然科学の実験のようなものをイメージするかもしれませんが、しかし、例えば人口とか内閣支持率といったデータがそうであるように、データは実験でしか得られないものではないし、実験でも実験以外の方法でも、得られたデータに裏づけられていることが科学では重要です。

2 実証主義と論理実証主義

19世紀になり、経験主義にもとづく科学が大学で教えられたり、科学

を応用した技術が人々の生活に大きな影響を及ぼすようになってくると、経験主義を過激にしたような「**実証主義**」という考え方を主張する人々が出てきました。これは、**データにもとづいて確かめられる知識以外の知識を否定する**というものです。その代表者がフランスのオーギュスト・コントという人で、彼は実証主義にもとづいて社会を研究する「社会学」を構想しましたが、実現できませんでした。この構想を引き継いで実現させたのが、エミール・デュルケムの『自殺論』という著作です。この著作の話は、後でもときどき出てきます。

話を実証主義に戻しましょう。20世紀に入り1920年代になると、当時急速に発展した論理学を実証主義に取り込んだ、「**論理実証主義**」という考え方が登場します。これは、**直接観察することで真偽を検証できる命題に基礎づけられていない命題は無意味であり、また、この基礎づけの手続きは論理学の規則にしたがっていなければならない**、とする立場です。といっても意味不明でしょうから、まずは論理学の規則の例として三段論法を取りあげることにしましょう。

三段論法というのは、「AはBである」という命題1と「BはCである」という命題2がともに真（正しい）ならば、「AはCである」という命題3も真（正しい）である、という規則のことです。「命題」という言葉が引にかかるようなら、何らかの説明内容を主張したもの、と思ってください。

この三段論法は、実は私たちが日常的に行っている思考においてもよく使われています。例えば、「彼女は大学生である」という命題1と「大学生は18歳以上である」という命題2から、「彼女は18歳以上である」という命題3を導くような思考です。

このような日常的な思考ですと、命題1や2の裏づけとなるデータの提示が求められることは減多になく、「それって本当？」と問い返されたら、新聞や雑誌で読んだとか、テレビで有名人がそういつてたとか答えれ

ばすむ場合がほとんどでしょう。

しかし例えば、「この地域の住民は塩分摂取量が多い」という命題 1 と、「塩分摂取量が多い人は高血圧の場合が多い」という命題 2 から、「この地域の住民は高血圧の人が多い（はず）」という命題 3 を導くような科学的思考の場合だと、命題 1 や 2 の裏づけとなるデータの提示を求められるのが、むしろ当たり前になっているのです。そして論理実証主義の立場では、命題 1 や 2 の裏づけとなるデータは、最終的には直接観察できるものでなければなりません。これが「基礎づけ」ということの意味です。

なお、「塩分摂取量が多い人は高血圧の場合が多い」という命題のように、多くの対象にあてはまる科学的説明は、「理論」とか「法則」と呼ばれることがあります。この用語については第 2 講で詳しく説明します。

3 反証主義

上述の経験主義、実証主義、論理実証主義の考え方は、データによる裏づけ（検証）こそが科学の特徴と考える点では共通しています。しかし、1930 年代になるとカール・ポパーという人がこれに異議を唱え、むしろデータによる**反証こそが科学の特徴**だと主張しました。これを「**反証主義**」といいます。

どれほどのデータで裏づけられた科学的説明であろうと、1 つでもそれに反する証拠（反証）が出てくればそれは間違っていることになります。このため、仮説がデータによって検証されて真の科学的説明となることなど永遠に不可能であり、むしろ**反証が出てくるたびにそれまでの科学的説明が捨て去られ、反証に対応できる新しい科学的説明が生み出されることこそが、科学というものの特徴**と考えるべきだ、とポパーはいうのです。

ここで注意してほしいことがあります。それは、反証主義においてもデータによる裏づけの重要性が否定されたわけではないということです。

反証に対応できる科学的説明とは、反証となるデータさえもその裏づけとなるような科学的説明ということだからです。

反証主義という考え方は、後述する統計的検定の考え方と相通ずるものがあります。詳しくは第5講「3 統計的検定」「(1) 基本的な考え方」をみていただきたいのですが、検定によって確かめたい命題を否定する命題（「帰無仮説」といいます）を、データによって否定できるかどうかを問うというのが、統計的検定の論理だからです。いいかえますと、検定では「AはBではない」ということがいえないかどうかを問うのであって、それによって確かめられるのは「AはBである」か「AはBではない」ではなく、「AはBではないとはいえない」か「AはBではないといえる」かなのです。ですから、AはBであると同時に、B以外のまだ知られていない何ものかでもある可能性は残り続けるのです。

4 パラダイム論

反証主義に対しては、とくに理論や法則と呼ばれる科学的説明の場合、よほどの反証でない限りその一部が手直しされるだけで、理論や法則の全体が捨て去られることはないという、有力な反論が出されました。この反論の先駆けとなったのが、1960年代に『科学革命の構造』という著作の中で、トーマス・クーンという人が論じて一大ブームとなった、「パラダイム論」という考え方です。

「パラダイム」とは、ある分野の研究者たちの間で、一定期間、その分野における問題の立て方や解き方のモデルとされる科学的業績のことです。例えば光学という分野では、その分野の研究者たちはニュートンの『光学』という著作が刊行されて以降は、そこに書かれていることにしたがって研究を行うようになったといわれています。このように、当初は指導的研究者が書いた古典がパラダイムの役割を果たし、やがてそれがマニユア

ル化されて教科書というかたちになっていきます。つまり、パラダイムというのは研究者にとってのお手本であり、それにもとづく研究者たちの一定の行動パターンこそが科学だというのが、パラダイム論の主張です。

5 パラダイム論以降の科学観

—科学知識の社会学、実験室の人類学—

パラダイム論の主張には、研究者の実際の行動をみていかなければ、科学の本当の特徴を明らかにすることはできないという考え方が含まれています。そして1970年代以降、パラダイムにとどまらない科学の社会的側面、つまり、さまざまな人間関係の中で研究者はどのような影響を受け、また、周囲にどう働きかけているのかが注目されるようになります。

こういった関心にもとづく1つの立場として、「科学知識の社会学」(Sociology of Scientific Knowledge、その頭文字から「SSK」とも呼ばれます)というものがあります。この立場では、**科学的知識は研究者が生きる社会的状況の影響を受けると考え、その影響関係を解明しようとしています**。このSSKの代表的な研究では、19世紀にフランスであったパストゥール vs. プーシェの自然発生説論争が、題材として取りあげられています。

パストゥールは、その名を冠した世界的な研究所があるほど、医学・微生物学の分野で大きな成果をあげた人で、プーシェが唱える自然発生説(無生物からの生物の自然発生がありうるとする学説)をこの論争で打ち負かしました。しかしその過程では、生物は神の被造物というキリスト教の教義に反するとして、自然発生説を何とか葬り去ろうとするカトリック勢力が、当時政治的に優勢だったことや、敬虔なキリスト教徒だったパストゥールが、自然発生が起こったかにみえる実験を失敗とみなしたことなど、宗教的・社会的な要因が大きく影響していたというのです(金森修・中島秀人編著『科学論の現在』、勁草書房、2002年、pp.7-9参照)。

こうしたSSKとは別に、「**実験室の人類学**」というものもあります。この立場では、実験に適した研究材料の入手や、有能なメンバーから成る研究チーム、実験装置をうまく作動させる熟練の技、限られた資金の効果的な使用といった、**さまざまな物質的・社会的条件のもとで科学的事実構築**されるとして、その構築の過程を解明しようとします。つまり、SSKのように科学の社会的側面に注目するだけでなく、物質的な側面にも焦点をあてている点に特徴があります。

6 社会調査の科学としての特徴

この第1講では、科学という人間の活動の特徴をどこに求めるか、その考え方の移り変わりをみてきましたが、**どの考え方にしても、科学の何らかの側面をとらえている**といえそうです。現在でもデータによる裏づけは重視されていますし、パラダイムから外れたことをやろうとすると研究者として認められにくいですし、研究活動はさまざまな物質的・社会的条件の制約を受けているように思われます。また、かつては**科学の特徴について原理的なレベルで論じられていたものが、近年では研究者の実際の行動**といった、**具体的なレベルで論じられるようになってきた**という流れも読み取れます。

こうしたことをふまえると、**社会調査の科学としての特徴は、社会調査における原理的な部分だけではなく、研究者が実際に行っている手順**にもあると考えられます。このため、社会調査の手順や原理を説明する際には、とくに手順について具体的に記述する必要があります。



第1講のまとめ

- ① 経験主義は経験をすべての知識の根本とする立場であり、経験によって得られたデータを知識の根拠としていることが科学の特徴と考える。

- ② 実証主義はデータにもとづいて確かめられる知識以外を否定する立場、論理実証主義は直接観察することで真偽を検証できる命題に基礎づけられていない命題は無意味であり、また、この基礎づけの手続きは論理学の規則にしたがっていなければならないとする立場である。
- ③ 反証主義はデータによる反証、つまり反証が出てくるたびにそれまでの科学的説明が捨て去られ、反証に対応できる新しい科学的説明が生み出されることこそが科学の特徴という立場である。
- ④ パラダイムとは、ある分野の研究者たちの間で、一定期間、その分野における問題の立て方や解き方のモデルとされる科学的業績のことであり、このパラダイムにもとづいた科学者たちの一定の行動パターンこそが科学だというのが、パラダイム論の主張である。
- ⑤ 科学知識の社会学（SSK）は、科学的知識は研究者が生きる社会的状況の影響を受けると考え、その影響関係を解明しようとするもの、実験室の人類学は、科学的事実はさまざまな物質的・社会的条件のもとで構築されるところとして、その構築の過程を解明しようとするものである。
- ⑥ 科学の特徴についてのどの考え方も科学の何らかの側面をとらえているが、論じられるレベルは原理的なものから具体的なものに变化してきている。このため、社会調査の科学としての特徴を論じる場合、社会調査における原理的な部分だけではなく、研究者が実際に行っている手順にも注目する必要がある。

第2講

よく使われる言葉の意味



第2講のねらい

以下では、社会調査とその関連領域でよく使われる言葉の意味を解説します。中でも、「変数」、「量的変数」、「カテゴリー変数」、「独立変数」、「従属変数」、「尺度」、「信頼性」、「妥当性」の意味は、ぜひ覚えてしまってください。また、言葉の意味を一覧できる付録 1 のリストも適宜ご利用ください。

1 理論

第1講の「2 実証主義と論理実証主義」の最後で述べたように、多くの対象にあてはまる科学的説明は、「理論」とか「法則」と呼ばれることがあります。社会調査とその関連分野では、「法則」という言葉はあまり使わないので、「理論」という言葉として説明していきます。

先述の『自殺論』では、「統合が弱すぎると自殺が増加する」という理論が出てきます。この理論は、「統合」と「自殺」という2つの概念が意味する現象間の関連を表現したもので、この2つの概念がそれぞれ意味するあらゆる現象群の間にその関連がみられることや、さらに、そうした2つの現象群の間に何らかの因果関係があることを想定しているといえます。つまり理論は、複数の概念が意味する現象間の関連を表現したもので、それぞれの概念が意味するあらゆる現象群の間にその関連がみられることや、そうした現象群の間に何らかの因果関係があることを想定したものであるわけです。

2 概念、定義、指標化

上述の理論は、「統合」と「自殺」という2つの概念が意味する現象間の関連を表現したものでしたが、これらの概念が意味する現象はそれぞれ